青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析

岡本祐子・古賀真紀子

The Reconsideration of the Concepts of Readiness for Parenthood and Analysis of the Related Factors for its Development in Adolescence

Yuko Okamoto, Makiko Koga

The purposes of the present studies were to reconsider the concepts of "readiness for parenthood" and to investigate the related factors for its development in adolescence. For development of readiness for parenthood, it was important to present a good model of parents to children. And those parents'roles must be covered all of the following roles: nursing of children, making up family-tie, house keeping, and taking care of old parents. In Study Ⅰ, the questionnaire consisted of 60 items was made out for measuring the readiness for parenthood covered these four parents' roles above. In Study Ⅱ, the questionnaire was destributed to 271 undergraduate and graduate students aged 18～26. The main results showed that the positive images of mother and father, experiences of helping house keeping, and coming in contact with children and aged persons had positive effect for development of readiness for parenthood.

【Key Words】 Readiness for parenthood, Parent-model, Parents image, Experience of helping house-keeping and coming in contact with children and aged persons, Adolescence.

問題および目的

近年,家族の絆の弱体化や家族内のコミュニケーションの貧困化,さらには子どもの虐待など,家族をめぐる問題が深刻化し,「親」のあり方が改めて問い直されている。子育てに対する親の無知や親としてのあり方がわからないまま親になってしまったことに由来する事件や臨床事例は急増して

いる。つまり，拡大家族から核家族への移行によって，家庭内での親役割の分担は消失し，母親一人が親役割を背負い込まざるを得ない状況が生まれ，育児ストレスや育児ノイローゼといったさまざまな問題が生じた。また，きょうだい数の減少や地域社会での交流の希薄化により、幼い子どもの世話をする親を身近に見たり，それを手伝ったりすることが減少した。そのため，自分の出産まで赤ん坊を身近に見たり抱いたりする経験のなかった母親は、親性を育む機会もなく，人間的には未成熟のまま親となるケースが少なくない。このことは父親にもあてはまる現象である。このように，今日の変動社会の中で，子どもは，将来自分が親となるイメージを簡単には描けなくなっており，成長過程において，親となる資質を育む心理社会的環境が崩れつつあると考えられる。

このような我が国の状況において，親となるための教育・学習の重要性は，ますます増大している。親教育は今日，さまざまな社会教育の場で行われているが，その多くは，すでに子育て中や出産を間近に控えた人々を対象にしたものであり，学習者のほとんどは女性であるのが現状である。このような親教育は，初めて子どもを育てる親にとっては，子どもや子育てに関する知識を習得したり，さまざまな不安やストレスを解消できる場として有効である。しかし，妊娠後出産までという短期間で親となる準備を達成するには，限界も多いことも事実である。上記のような親の未熟さが問題視されるのに伴い，青年中期・後期というより若い時期からの親準備性の育成が必要であることが指摘されている(伊藤，2003)。

これまで「親準備性」は，子どもに対する親としての役割を遂行するための資質，つまり「養育役割」としてとらえられ，1980年代以降，心理学の他にも，医学，教育学の分野で研究が行われてきた。「親準備性」は，「情緒的，態度的，知的に親としての役割を果たすために十分なレディネス」(井上・深谷，1983；久保田・渡辺，1999)，「心理的，行動的，身体的に育児行動を行うために必要な資質を形成していく，あるいは形成された状態」(滝山・斎藤，1997) 等，定義されている。その内容は，①子どものイメージ(武藤，1991；武藤・伊藤，1995)や，子どもへの関心・感情(荻津・山田，1992)など，子どもに関するもの，②母親による子育てへの構え・育児観(井上・深谷，1983)，性・結婚・夫婦の役割・育児についての意識と態度・性の受容(池田・中川・上田・小沢，1986)など，子育てに関するもの，③親志向性(山田，1987)，母性意識(久保田・渡辺，1999)，親への親和性(武藤，1991；武藤・伊藤，1995)，親への同一化(伊藤，2003)など，親となることに関するもの，としてとらえられている。

親準備性の形成には，妊娠以前の段階である乳幼児期から青年期までの経験が関わっており，誕生後，現実に親となるまでの経験と学習が重要な意味をもっている(久世，1995)。親準備性の発達に関わる要因として，自分が親から受けた養育体験が大きな影響を与えることは，斎藤・瀬口・本松(1992)，松岡・堀内・山中・伊藤(2000)の研究や乳幼児虐待をする親の臨床事例研究(例えば，武田，1998)によって指摘されている。さらに，子どもとの接触体験が多い者は，親準備性が高いという報告(牧野・中西，1989a, b)や，乳幼児への好意感情が高いという知見(青木・松井，1988)も見られる。

しかしながら，これらの研究はいずれも，親準備性を「養育役割」としてのみとらえており、子どもに生き方のモデル，特に将来，子育てのみならず，家庭を支え，経営していく存在としてのモデルを示すという視点が欠けている。つまり，子どもの養育役割は，親役割の中核であるが，家庭において親に求められる資質は，このような育児のみではない。家族の健康や家庭生活を維持できる家庭環境

を整える家事労働や,家族団欒や憩いの場を創り出すことも重要な資質である。さらに,老親との関わりや介護もまた,求められるようになっている。したがって,今日の家族のあり方に即した親としての役割をとらえ直す必要があると考えられる。将来,親となる子どもの発達には,そのモデルとなる親のあり方が重要な意味をもっており,そこには,このような家庭を経営していく親のあり方すべてを視野に入れた視点が必要であろう。今日の社会における親としての生き方モデルとは,「養育役割」に加えて,家族の絆を高める役割や,家事労働,介護の役割をも含めたものであると考えられる。したがって,本研究では,「親準備性」を「子どもが将来,家庭を築き経営していくために必要な,子どもの養育,家族の結合,家事労働,介護を含む親としての資質,およびそれが備わった状態」と定義する。

本研究では,この定義にしたがって,親準備性を測定する質問紙を作成し(研究Ⅰ),青年の親準備性に影響を及ぼす心理社会的要因について検討する(研究Ⅱ)ことを目的とした。

研 究 Ⅰ

目的

子どもの養育,家族の結合,家事労働,介護を含む「親準備性」を測定するための質問紙を作成する。

方法

1.調査対象者　中国地方の国立大学に在籍する18～27歳の大学生・大学院生で,回答に不備のある者および既婚者を除いた239名を分析対象とした(男性 166名,女性 73名)。平均年齢は,男性 22.2歳,女性 21.4歳。家族形態は,核家族 75.7%,祖父母と同居している拡大家族 23.9%,その他・不明 0.4%であった。親の就業形態は,父親:フルタイム 94.5%,パートタイム 0.4%,その他・不明 5.1%, 母親:フルタイム 35.6%,パートタイム 33.9%,専業主婦 25.9%,その他・不明 4.6%であった。

2.手続き

質問項目の選定　筆者の定義する親準備性を測定するための尺度は,これまで作成されていない。したがって,これまでの研究で用いられた親準備性に関連すると考えられる以下の尺度や質問項目を参考にして,調査項目を収集した。「育児への積極性尺度」(青木・松井,1988),「父親・母親のＰＭリーダーシップ測定項目」(福田,2002),「父親の家庭関与尺度」(平山,2001),「家族満足度尺度」(五十嵐,1992),「親役割観」(神谷,2001),「母親の養育態度」(金子・新瀬,2002),「親子のコミュニケーションの程度」(小西・黒川,2000),「親となることへの準備状態」(牧野・中西,1989a,b),「母性準備性尺度」・「性役割尺度」(松嶋・皆川・宮岡,2001),「母親意識に関する項目」(宮中,2001),「健康な家族変数を構成する項目」(茂木,1996),「親であることに対する態度尺度」(岡本・上地,1999),「母親役割の受容・子どもに対する感情に関する項目」(大日向,1988),「介護肯定的評価」・「介護負担感」(櫻井,1999),「子ども観尺度」(島袋・當山・喜友名,1998),「育児感情に関する項目」(首藤・馬場,1995),「家族コミットメント項目」(田中,1996),「子どもをもつことへの意識」(高橋・村井・小松,1994),「親準備性に関する項目」(滝山・斎藤,1997),「養育態度」(戸田,1990),「自立意識項目」・「自立意欲

項目」・「生活身辺行動項目」(渡邉,1992),「家族機能尺度(STFF)」(渡辺,1989),「家事労働の分類」(大町,1990),「赤ん坊・子どもへの興味・関心に関する項目」・「子どもをうまく扱える自信に関する項目」(中西,1999),「親準備性尺度」(松岡・和田・花沢,2000a,b),「親になる意識項目」(小野寺・青木・小山,1998),「親同一性尺度」(山口,2001)。

収集された項目について、筆者の他に、家族心理学を専門とする研究者および大学院生3名により,内容的妥当性の検討を行った。その結果,103項目からなる質問紙(すべて5件法で回答)を作成した。

調査時期　2002年11～12月.

結果と考察

1.親準備性質問項目の選定

103項目の調査結果に対して,G-P分析を行った結果,有意差の認められなかった16項目を除外し,87の質問項目に対して,反復主因子法,バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化の様子などから,4因子が妥当であると判断し,4因子解を仮定したバリマックス回転を実行した。これをもとに,因子負荷が0.40に満たない項目26項目,および2因子にまたがって因子負荷が0.40以上を示したもの1項目を除外し,計60項目で再度,因子分析を行った。最終的に,項目数は60項目,4因子となり,全体に対する4因子の累積寄与率は42.67%であった(Table 1)。

第Ⅰ因子は,「家族と一緒に食事をしたり,話し合ったりするのは楽しい」,「家族はお互いに精神的な支えである」,「家族の中で言いたいことが言える」というような家族と関わることや関わり方への感情・意識を示すものであるため,「家族結合役割因子」と命名した(Mean 87.04, SD 13.82)。第Ⅱ因子は,「家事はおもしろい」,「部屋,トイレ,風呂など家を清潔に保つことができる」というような家事行動への感情や能力を示す項目であるため,「家事労働役割因子」と命名した(Mean 50.25,SD 11.28)。第Ⅲ因子は,「お年寄りと一緒にすごすのは楽しい」,「お年寄りはめんどうくさい存在だ」(逆転項目),「必要があれば介護をしようと思う」というような高齢者への感情や意識,介護への態度を示す項目であるため,「介護役割因子」と命名した(Mean 46.44, SD 8.69)。第Ⅳ因子は,「子どもが好きだ」,「子どもと一緒に遊ぶのは楽しい」,「将来、子どもを育ててみたい」というような子どもへの感情や意識,育児への態度を示す項目であるため,「養育役割因子」と命名した(Mean 35.84, SD 6.16)。これらの結果は,「問題」において述べた筆者の親準備性の4側面と一致しており,筆者の親準備性のとらえ方を支持するものであった。

2.信頼性の検討

親準備性の測定項目間の相関とα係数は,Table 2 に示した。Cronbachのα係数は,第Ⅰ因子 0.94,第Ⅱ因子 0.91, 第Ⅲ因子 0.89, 第Ⅳ因子 0.87という高い信頼性が得られた。また,内的統合性に関しては,一定の水準が示された。

以上の結果から,「親準備性」を測定するために必要な側面は,「家族結合役割」「家事労働役割」「介護役割」「養育役割」の4因子であることが示唆された。これまでの親準備性の研究においては,親準備性は,「子ども好き因子」「将来の子育てに対する不安因子」「子育てに対する評価・認識因子」

Table 1　親準備性項目の因子分析結果（バリマックス回転後）

No	質問項目	I	II	III	IV	共通性
第Ⅰ因子　家族結合役割因子（α=0.94）						
58	家族と一緒に食事をしたり、話し合ったりするのは楽しい。	.75	-.06	.07	.23	.63
59	家族と一緒にいると、楽な気持ちになる。	.75	-.01	.09	.08	.57
57	家族団らんに親しみを感じる。	.73	-.01	.10	.23	.59
60	家族は私にあまり関心がないようだ。＊	.69	-.04	.07	-.01	.49
64	家族の中で言いたいことが言える。	.68	.11	-.00	.07	.48
75	家族はお互いに精神的支えである。	.67	.00	.14	.16	.49
76	家族はお互いに信頼しているものだ。	.67	-.08	.16	.18	.51
73	将来、自分が育ったような家庭にしたい。	.66	.09	.06	.07	.46
67	家族が心情を訴えてもまともに取り合わない。＊	.65	.00	.12	.07	.44
62	嬉しいことがあると家族に報告する。	.64	.07	.14	.07	.44
65	家族と一緒に過ごす時間を大切にしている。	.63	.15	.20	.11	.48
63	家族に心を開いて内面的な話をする。	.63	.22	.15	.08	.47
78	家族は、必要なときにいてくれる。	.63	.10	.05	.20	.45
61	私の家族よりも他の家族のほうがもっと幸せだと思う。＊	.61	.06	.12	.01	.39
79	家族は、いざというとき、頼りになる。	.60	.05	-.01	.19	.40
66	緊張したり、どぎまぎしないで、自分の考えや考え方について家族と話し合うことができる。	.60	.18	.08	.13	.41
69	家族は、個々で抱えている問題についてお互い話さない。＊	.57	.07	.17	.05	.36
77	家族はお互いの話を聞いてやることが大切だ。	.56	-.03	.08	.22	.37
68	家族の前では素直にふるまわない。＊	.53	.11	.09	-.04	.30
72	家族は一体感をもつことが大切だ。	.53	-.04	.15	.15	.33
71	家族はお互いに理解しあうべきものだ。	.46	-.07	.13	.22	.27
70	家族はお互いに思いやるべきだ。	.45	-.02	.13	.27	.29
第Ⅱ因子　家事労働役割因子（α=0.91）						
42	部屋・トイレ・お風呂など、家を清潔に保つことができる。	.10	.80	.04	.05	.65
46	ふとんを干すなどして清潔に保つことができる。	.10	.77	.07	.05	.61
45	きちんとゴミを出すことができる。	.06	.73	.04	-.05	.54
40	衣服の整理・整頓ができる。	.08	.72	.04	.08	.53
34	将来きちんと家事をこなす自信がない。＊	.01	.67	.12	-.00	.46
39	衣類を清潔に保つことができる。	.06	.63	.09	.07	.42
43	庭があれば、きれいに手入れできる。	.09	.61	.09	.07	.39
56	家事はおもしろい。	.03	.61	.18	.21	.45
35	料理や洗濯、掃除をすることは楽しい。	.07	.59	.20	.10	.41
44	植物の水やりができる。	.05	.56	.18	.09	.36
37	食器などの後片付けができる。	.10	.56	.15	.01	.34
33	できることなら家事はしたくない。	.04	.55	.20	.04	.35
48	家計のやりくりができる。	-.08	.55	.05	-.05	.32
41	ボタン付けなどの必要な繕い物ができる。	-.04	.50	.02	.13	.27
36	食事を作ることができる。	.06	.42	.19	.09	.23
第Ⅲ因子　介護役割因子（α=0.89）						
80	お年寄りが好きだ。	.10	.12	.70	.22	.56
88	お年寄りのことはよくわからない。＊	.07	.15	.69	.01	.51
93	お年寄りとうまくコミュニケーションをとる自信がない。＊	.10	.08	.67	.03	.47
81	お年寄りと一緒に過ごすのは楽しい。	.12	.09	.66	.26	.53
92	お年寄りの世話をすることに負担や重荷を感じる。＊	.08	.23	.64	.02	.47
85	お年寄りとうまく接することができない。＊	.10	.08	.62	.09	.41
89	お年寄りは面倒くさい存在だ。＊	.16	.16	.61	.16	.45
84	お年寄りは何を考えているかわからなくて困る。＊	.11	.06	.55	-.01	.32
82	お年寄りを見ているとイライラする。＊	.15	.09	.55	.05	.33
83	お年寄りを見ていると優しい気持ちになる。	.15	.18	.53	.22	.38
91	病院か施設でお年寄りの世話をしてほしい。	.11	.06	.49	.04	.26
95	必要であれば、介護をしようと思う。	.20	.17	.45	.10	.28
97	高齢者や介護について学びたい。	-.02	.16	.44	.21	.26
101	介護をすると、家事・家族の世話・仕事などに支障が出る。＊	.16	.06	.44	-.06	.22
第Ⅳ因子　養育役割因子（α=0.87）						
1	子どもが好きだ。	.14	.05	.11	.83	.73
2	子どもと一緒に遊ぶのは楽しい。	.17	.06	.09	.77	.64
18	将来、子どもを育ててみたい。	.29	.09	.05	.72	.61
5	子どもを見ていると優しい気持ちになる。	.21	.08	.10	.64	.47
6	赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする。	.16	.10	.17	.60	.42
14	子どもは面倒くさい存在だ。＊	.33	.19	.22	.46	.40
25	子どもの成長の仕方や子育てについて学びたい。	.22	.08	.27	.43	.31
22	将来、自分が育児をするなんて考えたこともない。＊	.22	.15	.01	.42	.25
17	育児は楽しいと思う。	.35	.14	.24	.42	.37
	累積寄与率(%)	15.77	10.71	9.19	7.00	42.67

注．＊は逆転項目．

Table 2　親準備性の測定項目間の相関とα係数

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	α係数
第Ⅰ因子	1.00	0.18**	0.34***	0.50***	0.94
第Ⅱ因子		1.00	0.35***	0.26***	0.91
第Ⅲ因子			1.00	0.39***	0.89
第Ⅳ因子				1.00	0.87

注. ** p<.01, *** p<.001

「乳幼児に対する嫌悪因子」(牧野・中西, 1989a, b)や,「乳幼児に対する嫌悪因子」「子育てに対する嫌悪因子」「子育てに対する成長因子」「子育てに対する社会的認識因子」「伝統的子育て観因子」(大城・嘉数・石橋・金城, 1999)などとしてとらえられてきた。しかしながら,本研究においては,これらの因子はすべて「養育役割因子」としてまとめられた。このように,親性・親準備性は,子どもを養育する役割を担う者という従来の「親性」の視点のみでは不十分であり,家庭における親としての役割を多次元的にとらえることが必要であると考えられる。

研 究 Ⅱ

目的

青年の親準備性の達成と,①性別,年齢,家族形態,現在の居住形態,親の就労形態等のデモグラフィク要因,および,②自分の父親・母親イメージ,③家庭での手伝い体験,④子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験との関連性を分析し,親準備性の発達に影響を及ぼす要因について検討することを目的とした。

方法

1.調査対象者　広島県在住の18～26歳の専門学校生・大学生・大学院生で,回答に不備のある者および既婚者を除いた271名(男性 157名,女性 114名)を分析の対象とした。平均年齢は,男性 21.9歳,女性 21.0歳。家族形態は,核家族 68.4%,拡大家族 30.9%,その他 0.7%。居住形態は,一人住まい 73.5%,家族と同居 16.9%,寮 8.5%,その他 1.1%であった。親の就労形態は,父親:フルタイム 92.7%,パートタイム 0.4%,その他 6.9%, 母親: フルタイム 39.3%,パートタイム 33.8%,専業主婦 21.3%,その他 5.6%であった。

2.手続き　以下の内容からなる質問紙調査を実施した。①基本属性, ②研究Ⅰで作成した親準備性に関する60項目, ③自分の母親イメージに関する11項目(例: 母親は,理解がある, あたたかい,話しやすい,など), ④自分の父親イメージに関する11項目(例: 父親は,理解がある, あたたかい,おおらかだ,など)。以上②～④の項目は,「非常にあてはまる」(5)～「まったくあてはまらない」(1)の5件法で回答させた。⑤手伝い体験に関する7項目(自分に割り当てられた手伝いの有無,頻度,

満足感,貢献感,好き嫌い,大変さ,手伝いをする理由[以上、5件法]), ⑥学習・ふれあい体験に関する14項目(例:「きょうだいや知人の子どもの世話や遊び相手をしたことがある」「お年寄りの身の回りの世話をしたことがある」「サークルやボランティア活動で、子どもと遊んだことがある」「授業で高齢者の心身の特徴や介護などについて学習したことがある」など)。「よくある」(4)〜「全くない」(1)の4件法で回答させた。

結果および考察

1.青年の親準備性達成とデモグラフィク要因との関連性

親準備性の平均得点は,男性 213.70(SD 28.94),女性 233.99(SD 22.42)であり,t検定の結果,女性が男性よりも有意に高かった($t(270)=-6.50, p<.001$)。この結果は,伝統的性役割観が薄れつつあるとはいえ,今日なお,女性の方が男性よりも子育てや家庭経営について強い関心と義務感を有しているためであると考えられる。

年齢,家族形態,現在の居住形態,親の就労形態については,親準備性得点との間に有意な関連は認められなかった。

2.青年の親準備性達成と親イメージ,家庭での手伝い体験,子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験の関連性

(1)親準備性の関連要因の分析

青年の親準備性の発達に影響を及ぼす要因として,①親イメージ,②家庭での手伝い体験、③子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験を仮定して分析を行った。

これらの要因が,青年の親準備性達成に有意な説明力を有しているかどうかを検討するために,親準備性得点を基準変数とする重回帰分析を行った。基準変数および説明変数の各変数間の相互相関は,Table 3 に示した。変数間の相互相関は,最も高い値でも.54であったことから,多重共線性の影響は小さいものと判断して,すべての変数を用いて分析することとした。分析の結果,青年の親準備性達成に対して,母親イメージ,父親イメージ,家庭での手伝い体験,子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験のいずれも,大きい説明力を有していることが示唆された(Table 4)。

(2)親準備性高低群間の差異の分析

次に,親準備性高群・低群に分けてより詳細に,これらの要因が親準備性の発達とどのような関連がみられるのかについて検討した。親準備性の得点分布は,Figure 1 に示した。平均得点が222.17点であったため,223点以上を親準備性高群(以下,H群と略記),222点以下を親準備性低群(以下,L群と略記)として,以下の分析を行った。

1)親準備性と親イメージとの関連性

親準備性の高低群別に,母親イメージ,父親イメージの得点について,t検定を行ったところ,母親イメージ,父親イメージのいずれも,親準備性H群の方がL群よりも有意に高い得点を示した(Table 5)。

斎藤・瀬口・本松(1992)は,妊婦を対象に,子どもや母親に対する感情と母性意識について検討し,子どもの頃の母親との関わりで,母親に対して温かい印象をもっている女性は,母性意識が高いこと

Table 3　重回帰分析に用いた変数間の相関とα係数

	母親イメージ	父親イメージ	手伝い体験	学習・接触体験	親準備性	α係数
母親イメージ		.37***	.34***	.10	.44***	.67
父親イメージ			.23***	.08	.48***	.68
手伝い体験				.35***	.54***	.63
学習・接触体験					.32***	.73
親準備性						.56

注. *** p<.001

Table 4　親準備性得点を従属変数とする重回帰分析の結果

	親準備性
母親イメージ	.198***
父親イメージ	.317***
手伝い体験	.340***
学習・ふれあい体験	.150**
説明率 R^2	.471

注. 表中の数値は標準偏回帰係数β　**p<.01　***p<.001

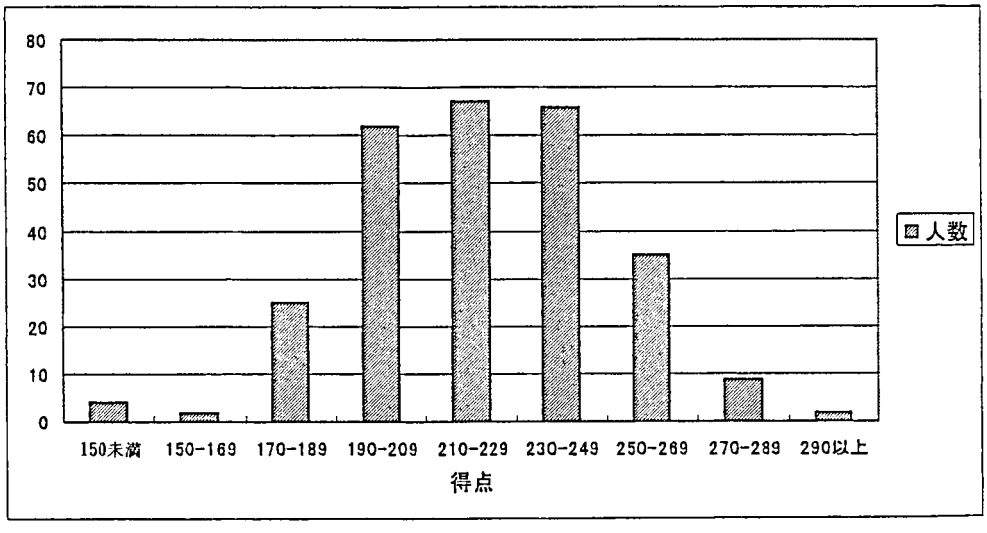

Figure 1　親準備性得点の人数分布

Table 5　親準備性と親イメージの関連

	H群 (N=136) M (SD)	L群 (N=135) M (SD)	t値
母親イメージ	41.14 (6.11)	37.21 (6.27)	7.35 ***
父親イメージ	41.18 (8.01)	36.34 (6.22)	5.04 ***

注. *** p<.001

を報告している。また松岡・和田・花沢(2000a, b)は,青年男女の母性度・父性度の発達に関連する要因について分析し,自分の受けた養育体験と母性度との関連性を示唆している。氏家(1995)は,子ども時代の母親についての記憶と母親としての態度の関連性を検討し,子ども時代の母親のイメージが肯定的な母親は,否定的または中間的なイメージをもつ母親よりも,母親としての肯定的態度を有していることを見出している。本研究の結果も,これらの先行研究を支持する結果であった。さらに本研究では,母親イメージのみでなく父親イメージもまた,親準備性の発達に関わる要因であることが示唆された。これらの結果より,母親のみでなく父親も,青年にとって家庭を運営していく「親」モデルとして重要な役割を担っていると考えられる。

2)親準備性と家庭での手伝い体験との関連性

家庭での手伝い体験については,「自分に割り当てられた手伝いの有無」「手伝いの頻度」「手伝いをした後の満足感」「手伝いをした後の貢献感」「手伝いの好き嫌い」「手伝いの大変さ」「手伝いをする理由」の7つの側面から回答を求め,これらを総合して手伝い体験とした。親準備性高低群別に,これらの得点の差異を検討したところ,「手伝いの大変さ」を除いたすべての項目において,H群がL群よりも有意に高い得点を示した(Table 6)。

Table 6　親準備性の手伝い体験との関連

	H群 (N=136) M(SD)	L群 (N=135) M(SD)	t値
有無	1.56(0.50)	1.32(0.47)	3.91***
頻度	3.36(1.22)	2.54(1.13)	5.30***
満足感	3.47(0.73)	3.11(0.94)	3.22**
貢献感	3.92(0.82)	3.44(0.75)	4.63***
好き嫌い	3.32(0.90)	2.79(0.93)	4.43***
大変さ	3.03(0.97)	3.07(1.01)	-0.35
理由	3.87(1.25)	3.39(1.36)	2.79**
総合	22.50(3.43)	19.68(3.08)	6.61***

注. ** p<.01, *** p<.001

これらの結果より，親準備性H群の方がL群よりも，家庭において決まった手伝いをより高い頻度で行っており，その満足感、貢献感も高いことが示された。また，H群はL郡に比べて，手伝いをする理由も，「ご褒美がもらえるから」「手伝うように言われるから」といった消極的な理由ではなく，「家族が困っているから」「手伝いたいから」など，家族を助けたいという積極的な理由の方が多かった。手伝いの大変さには有意差が見られなかったにもかかわらず，満足感や貢献感では，H群の方がL群よりも高かったことから，家庭での手伝いに積極的に意義を見出し，大変ではあるが家庭での仕事の重要性を知ることで，親準備性は発達していくと考えられる。つまり，子どもの立場であっても家族の一員として，家事労働をはじめとする家庭生活を支える役割を担うことは，家事労働の技術の向上のみでなく，社会的責任性や向社会的行動を育て、親としての役割を理解しそれを担うために重要な体験であると考えられる。

3)親準備性と子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験との関連性

子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験は，Table 7 の14項目について回答を求めた。これらの14項目について，以下の手順で因子分析を行った。共通性の初期値をONEとした反復主因子法を実行し，継続因子との固有値に基づいて3因子解が適当と判断し，3因子解を仮定したバリマックス回転を実行した。これをもとに，因子負荷が0.40に満たない項目1項目(「お年寄りと話したことがある」)を除外し，計13項目で再度因子分析を行った。最終的に項目数 13項目3因子となった。全体に対する3因子の累積寄与率は，61.85%であった(Table 7)。

親準備性高低群別に，これらの3因子の得点についてt検定を行ったところ，学習体験因子，子どもの世話体験因子，ボランティア体験因子のいずれにおいても，H群がL群よりも有意に高い得点を示した(Table 8)。この結果は，子どもや高齢者についての学習やふれあい体験は，親準備性の発達に積極的な意味をもつことを示している。幼児とのふれあい体験が「養育役割」としての親準備性や母性意識の発達に影響を及ぼすことは，斎藤・塚田・高山(1994)によって指摘されている。さらに，Table 8 の結果は，本研究で定義した，家庭を経営していく「親」モデルとしての親準備性の発達に，子ども・高齢者との学習・ふれあい体験が積極的な影響を及ぼすことを示唆している。

今日，少子化，核家族化，地域交流の希薄化といった子どもをとりまく環境の変化が，青年の親になるための資質を発達させる機会を減少させていると言われている。今日，学校教育の中で，子どもや高齢者，地域の人々との交流の機会を設けたり，そのような学習の場を学校外でも広げようとボランティア活動を奨励する動きも見られる。本研究の結果は，これらの活動の重要性を支持し，さらに単に学校の授業で子どもや高齢者について学ぶのみでなく，実際にふれあうことや，ボランティア活動など課外の活動も有意義であることを示唆するものである。

3.全体的考察

本研究では，従来の「養育役割」のみでなく，家庭を経営していく「親」モデルを子どもに呈示するという視点から，青年の親準備性の発達について検討した。研究Ⅰにおいて，親準備性として，養育役割，家族結合役割，家事労働役割，介護役割の4つの因子が見出された。また，青年の親準備性の発達に影響を及ぼす要因として，性別，父親・母親イメージ，手伝い体験，子ども・高齢者についての学習・

Table 7　学習・ふれあい体験の因子分析結果（バリマックス回転後）

No	質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
第Ⅰ因子　学習体験因子（α=.90）					
12	授業で、高齢者の心身の特徴や介護などについて学習したことがある。	.81	.15	.17	.70
6	授業で、子どもの心身の特徴や保育などについて学習したことがある。	.78	.16	.16	.67
14	授業で、結婚や家族、家庭生活について考えたことがある。	.73	.13	.08	.55
13	授業で、お年寄りを観察したりお年寄りと交流したりしたことがある。	.72	.18	.37	.69
7	授業で、子どもを観察したり子どもと遊んだりしたことがある。	.68	.20	.36	.64
11	お年寄りの身の回りの世話をしたことがある。	.55	.17	.49	.56
第Ⅱ因子　子どもの世話体験因子（α=.83）					
1	赤ちゃんを抱っこしたりおんぶしたりしたことがある。	.18	.82	.08	.72
2	きょうだいや知人の子どもの世話や、遊び相手をしたことがある。	.14	.72	.14	.56
5	小さな子どもの身の回りの世話をしたことがある。	.29	.69	.32	.66
第Ⅲ因子　ボランティア体験因子（α=.78）					
10	サークルやボランティア活動で、お年寄りと交流したことがある。	.47	.09	.66	.66
4	サークルやボランティア活動で、子どもと遊んだことがある。	.28	.32	.63	.58
9	老人ホームなどの行事を手伝ったことがある。	.59	.12	.61	.73
3	子ども会の行事などを手伝ったことがある。	-.03	.37	.43	.32
	累積寄与率(%)	29.60	16.19	16.06	61.85

Table 8　親準備性と学習・ふれあい体験との関連

	H群（N=136） M(SD)	L群（N=135） M(SD)	t値
学習体験因子	15.08(5.75)	12.74(4.72)	3.66***
子どもの世話体験因子	8.74(2.53)	7.50(2.38)	4.17***
ボランティア体験因子	8.93(3.59)	7.87(2.91)	2.66**

注. ** p<.01, *** p<.001

ふれあい体験が示唆された。上記の視点から親性・親準備性をとらえることが妥当であること，また母親イメージだけでなく父親イメージ，さらに家庭内外において，家庭経営のための仕事，子ども・高齢者とのふれあいといった実体験が，青年男女の親準備性の発達に肯定的な影響を及ぼすことを実証的に示したことは，本研究の新たな知見である。特に，家庭での手伝い体験や学校・家庭・地域社会での子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験が，青年の親準備性の発達に積極的な影響を及ぼすという結果は，家庭教育力の低下が懸念される今日，家族員同士のふれあいや，家庭を協力して運営していく営みが，子どもの発達に重要な意味を持っていることを実証的に示すものである。子どもや高齢者という異世代について学習し，交流をもつことの重要性が改めて示唆されたことも，これからの学校教育や社会教育の内容や方法への応用が期待される。

本研究では，青年後期にあたる大学生・大学院生を対象としたが，親準備性達成度の年齢による相違は認められなかった。今後，より発達段階の早い時期にあたる中学生や高校生を対象とすることにより，それぞれの発達段階に応じた教育・学習課題を検討していくことが求められる。

文　献

青木まり・松井豊　1988　青年期後期における女性性の発達Ⅱ：異性性と母性準備性の構造について．北海道教育大学紀要：第１部Ｃ，39，85-94.

福田歌織　2002　親のＰＭ式リーダーシップ測定尺度作成の試み．　日本発達心理学会第13回大会発表論文集，226.

平山聡子　2001　中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連：父母評定の一致度からの検討．　発達心理学研究，12，99-109.

五十嵐敦　1992　高校生の親の家族関係と満足度．福島大学教育学部論文集，52，67-76.

池田紀子・中川礼子・上田礼子・小沢道子　1986　親になることとその情報源について（第３報）．母性衛生，27，788-791.

井上義朗・深谷和子　1983　青年の親準備性をめぐって．　周産期医学，13，2249-2252.

伊藤葉子　2003　中・高校生の親準備性の発達．　日本家政学会誌，54，801-812.

神谷哲司　2001　青年が認知する親の養育態度と青年自身の親役割観との関連．　母性衛生，42，670-676.

金子劭栄・新瀬和夫　2002　小学生の向社会性と親の養育態度．　金沢大学教育学部紀要：教育科学編，51，145-158.

小西史子・黒川衣代　2000　親子のコミュニケーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす影響．日本家政学会誌，51，273-286.

久保田まり・渡辺恵子　1999　心理的親準備性から親性への移行に関する発達的研究．昭和大学教養部紀要，30，21-33.

久世敏雄　1995　現代青年の心理と病理．　福村出版.

牧野カツコ・中西雪夫　1989a　高校生の「親となることへの準備状態」と保育教育（第１報）：「準備状

態」の測定尺度の作成. 日本家庭科教育学会誌, 32, 51-53.
牧野カツコ・中西雪夫 1989b 高校生の「親となることへの準備状態」と保育教育(第2報):「準備状態」の形成に影響を与える要因. 日本家庭科教育学会誌, 32, 55-59.
松岡知子・堀内寛子・山中亜紀・伊藤倫子 2000 男女大学生の親になることに関する意識. 母性衛生, 41, 398-404.
松岡治子・和田佳子・花沢成一 2000a 青年期男女における親準備性の性差および母性度・父性度の発達:親準備性の研究(1). 母性衛生, 41, 492-499.
松岡治子・和田佳子・花沢成一 2000b 青年期男女における母性度・父性度に関する要因の検討:親準備性の研究(2). 母性衛生, 41, 500-505.
松嶋弥生・皆川恵美子・宮岡久子 2001 青年期後期における「母親準備性」と性役割との関連性:看護学生と他学科の学生との比較. 母性衛生, 42, 645-652.
宮中文子 2001 「母親への発達」に影響する父親および家族の要因:生後10カ月の調査による分析. 母性衛生, 42, 677-685.
茂木千明 1996 家族の健康性に関する一研究:大学生の子どもの観点から. 家族心理学研究, 10, 47-62.
武藤八重子 1991 保育学習の情意評価における男女差(第1報告). 家政教育学会誌, 34(3), 29-35.
武藤八重子・伊藤葉子 1995 高校保育学習の情意評価における男女差. 福島大学教育実践研究紀要, 28, 51-58.
中西由里 1999 妊婦の「養護性(nurturance)」測定の試み:子どもの有無と対子ども感情別の比較. 母性衛生, 40, 72-77.
荻津文子・山田節子 1992 保育教育における親準備性に関する実証的研究. 秋田大学教育学部教育研究所報, 29, 36-53.
大城りえ・嘉数朝子・石橋由美・金城智子 1999 男女大学生の親準備性状態. 沖縄キリスト教短期大学紀要, 28, 77-85.
大日向雅美 1988 母性の研究. 東京:川島書店.
岡本清美・上地安昭 1999 第二の個体化過程からみた親子関係および友人関係. 教育心理学研究, 47, 248-258.
小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 1998 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究, 9, 121-130.
大町淑子 1990 家事労働に関する考察(第1報). 千葉大学教育学部研究紀要 第二部, 38, 133-150.
斎藤益子・瀬口チホ・本松研一 1992 妊婦の母性意識とその形成に影響する因子:母親・夫・幼い子どもとの関わりより. 母性衛生, 33, 64-72.
斎藤益子・塚田トキエ・高山巌 1994 母性意識に関する研究(第2報):未婚女性の母性意識とその形成に影響する因子:母親・弟妹・幼児との関わりから. 母性衛生, 35, 33-44.

櫻井成美　1999　介護肯定観がもつ負担軽減効果.　心理学研究，70，203-210.
島袋恒男・當山りえ・喜友名静子　1998　女子短大生の「子ども観」に関する研究Ⅱ:保育職志望度と地域特性との関連で.　琉球大学教育学部紀要，52，193-199.
首藤敏元・馬場康宏　1995　母親の育児感情と幼児の社会的コンピテンスに関する研究.　埼玉大学紀要:教育学部(教育科学)，44，53-67.
高橋ゆかり・村井文江・小松美穂子　1994　子どもを持つことに関する女子学生の意識.　母性衛生，35，139-142.
武田京子　1998　わが子をいじめてしまう母親たち.　京都:ミネルヴァ書房.
滝山桂子・斎藤一枝　1997　中学生・高校生・大学生の親準備性の実状:秋田県における調査から.　秋田大学教育学部研究紀要:教育科学部門，52，39-46.
田中佑子　1996　単身赴任者の組織コミットメント・家族コミットメントとストレス.　社会心理学研究，12，43-53.
戸田弘二　1990　女子青年における親の養育態度の認知とInternal Working Models との関連.　北海道教育大学紀要:第1部C，41，91-99.
氏家達夫　1995　子ども時代の母親についての記憶が母親としての態度に及ぼす影響について.　母性衛生，36，173-180.
渡邉惠子　1992　自立と自己の性の受容(3):性差の検討.　日本女子大学紀要:人間社会学部，3，1-14.
渡辺さちや　1989　家族機能と自我同一性地位の関わり:青年期の自立をめぐって.　家族心理学研究，3，85-95.
山田順子　1987　大学生の親志向性意識に関する研究.　東京家政学院大学紀要，27，167-179.
山口雅史　2001　親同一性を構成する3つの次元:幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造.　家族心理学研究，15，79-91.